

1面のつづき

1945年8月9

日、長崎で被爆した横山幸吉さんは幸いケガもなく、憲兵みたいなおとなから「救護を手伝え」といわれまして。4人1組で死んでいるのか生きているのかわからない人たちが軍の病院に運ぶ作業をしました。

反戦で「万歳」と

食べるものもなく、故郷に帰りたいと思って、その作業から逃げ出した横山さん。長崎駅で駅員から「はんこを押したこの紙一枚あれば、日本中どこへでも行ける」といわれ、汽車に乗りました。広島駅で見た市内はあたり一面焼け野原で、タンクから水がジャンジ

長崎・ビキニ 二重被ばく

「ノーモア核実験被害者」
共同の力で日本の核禁条約参加を

ヤン噴き出ししてました。岡山県宇野港から四

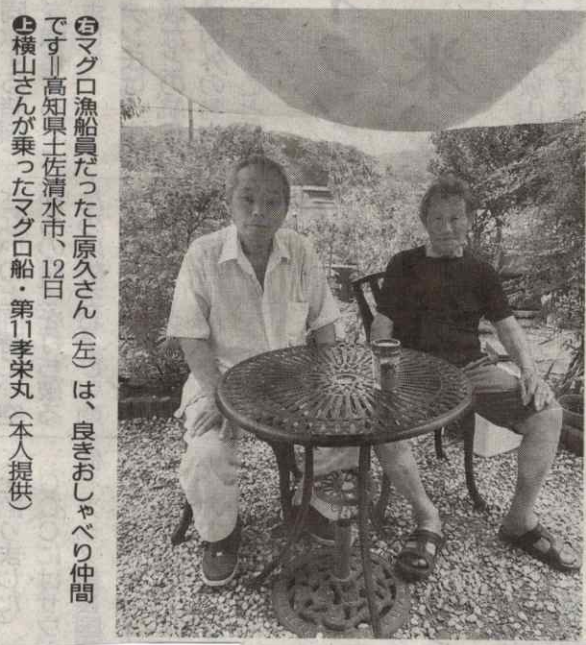
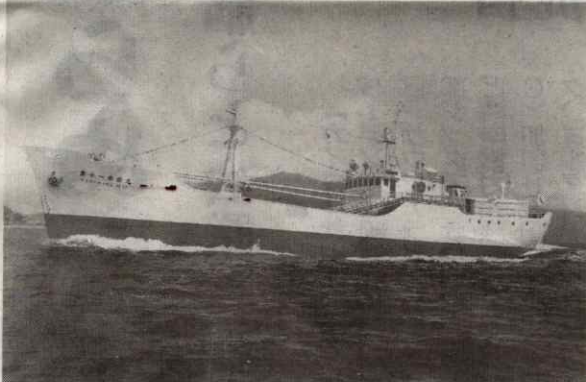
国行き連絡船に運よく乗れて、歩いたりトラックの荷台に乗せてもらったりして、故郷をめざしました。宿毛あたりで人が騒いでいました。8月15日で戦争に負けた知らせでした。横山さんは、思わず負けてよかったと万歳しました。

水だけで飢えをしのぎ、やっと家にたどり着くと、お母さんが生きていたのかと喜んでくれました。髪がバラバラと抜けたとき、姉が「長崎の

原爆のせいかね」といわれたことを今も覚えていいます。

17歳でマグロ船 被爆し痩せこけた体

が回復した横山さんが、「重労働だ」というマグロ船の漁船員になったのは、17歳のときでした。父親が事業に失敗し、一家を支えたいという思いからでした。第2長栄丸や第11孝栄丸などいくつかのマグロ船に乗りました。「マグロ船は地獄やけん。重労働だ。朝4時ごろ起きて、500枚の漁具を海に放り投げる。3時間はかかる。マグロがえさに食いつくまでの2時間ぐらいい流して、機械で巻



①マグロ漁船員だった上原久さん(左)は、良きおしゃべり仲間です。高知県土佐清水市、12日
②横山さんが乗ったマグロ船・第11孝栄丸(本人提供)